

つくば市豊里地区における金村信仰の受容形態

松 井 圭 介

- | | |
|-------------------|----------------------|
| I はじめに | IV-3 団体講の信仰事例 |
| II 金村別雷神社と氏子地域の概要 | 1) 高野地区 |
| II-1 金村別雷神社の来歴 | 2) 中東地区 |
| II-2 氏子地域 | IV-4 日月年参講の信仰事例 |
| III 個人崇敬者の祈願特性 | 1) 大山地区 |
| III-1 祈願内容 | 2) 木俣地区 |
| III-2 参拝季節 | IV-5 金村講にみられる信仰形態の特性 |
| III-3 集落別分布 | 1) 結成年代と結成理由 |
| IV 金村講の組織と信仰形態の特性 | 2) 世話人 |
| IV-1 祈雨祈祷 | 3) 信仰形態 |
| IV-2 豊作祈願 | V おわりに |

キーワード：信仰圏、金村講、従属的組織、鎮守神

I は じ め に

信仰圏の空間構造を解明しようとする試みは、従来より民俗学や地理学の分野で、研究蓄積がなされてきた。わけても、宮田（1961）を嚆矢とする山岳信仰圏の研究では、聖地（山岳）を中心とする同心円的な地帯構造が指摘され、この同心円モデルに基づいた実証研究が蓄積されてきたことが指摘されている（金子，1995；Matsui，1998）。信仰圏を文化地理学の立場から考える際に重要な視点は、信仰圏内部が均質な空間ではない点、すなわち信仰者の分布、宗教景観、信仰形態などを指標としてその非均質性を明らかにするとともに、信仰圏が地域分化する様態を解明する点にある。筆者は別稿にて、金村別雷神社（茨城県つくば市）の信仰圏が、神社を中心とする短径20km、長径50kmの楕円形状に位置する第1次信仰圏（近隣地域）とその南側外縁部100km圏に広がる第2次信仰圏（外縁地域）の二つの空間に区分されることを示した（松井，1999）。本稿では、このうち第1次信仰圏の事例として、つくば市豊里地区を研究対象地域に選定し、個人崇敬者（昇殿祈願者）の分布、祈願内容、参拝時期、及び金村講の組織と信仰形態（代参者、儀礼）の検討を通して、金村信仰の地域特性を示すことを目的とする。資料には、金村別雷神社社務所所蔵の講社台帳、個人参拝記録、奉納帖を利用した。

Ⅱ 金村別雷神社と氏子地域の概要

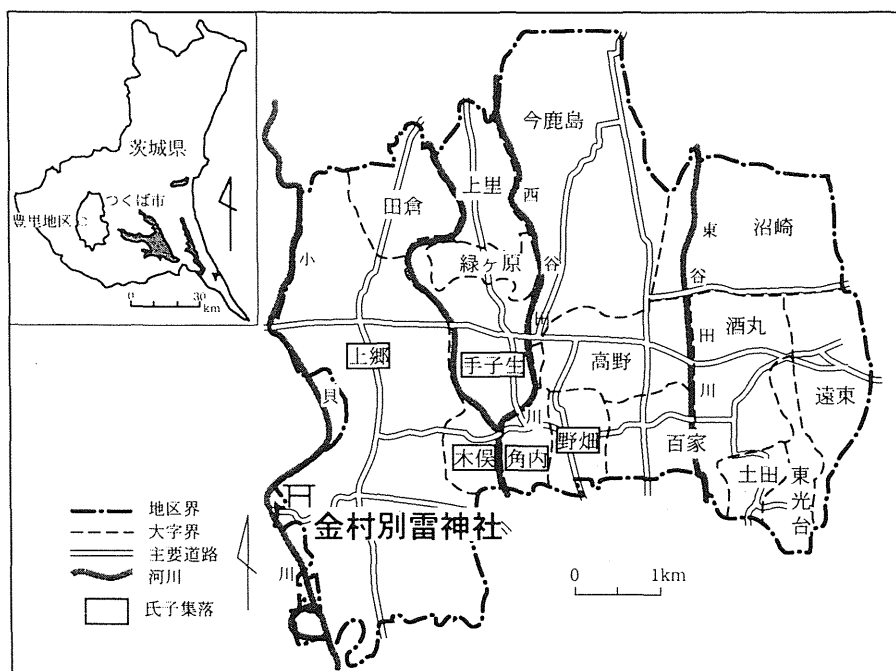
Ⅱ-1 金村別雷神社の来歴

金村別雷神社は、つくば市の西端、旧豊里町の上郷地区に鎮座する旧郷社格を持つ神社である（第1図）。931（承平元）年、豊田家初代領主将基によって、賀茂別雷神社の分霊を勧請して創建されたという縁起を有する。金村別雷神社は、小貝川が形成した沖積低地の氾濫原に立地している。この小貝川は、古来より河道の定まらない暴れ川で、一度大雨が降れば、付近の沖積低地を乱流し、大きな水害をしばしばもたらしてきた。河川沿岸地域には洪水の特徴的な地形である河跡沼が残っている。しかし伝承によると、いかなる激しい洪水が発生した際にも、金村別雷神社の境内地は冠水することがなかったとされている（串田，1978）。

金村別雷神社は、金村様や雷様と呼ばれ、創建以来、五穀豊穡をもたらす農業神として地元住民の崇敬を集めてきた。金村別雷神社は関東三雷神の一つとして、信仰圏は氏子地域を越えて、広く関東地方に広がっている。これに呼応して、金村別雷神社に寄せられる信仰も多様であり、五穀豊穡祈願や雹雷除けを始めとし、家内安全、無病息災の神としても信仰されている（豊里町史編纂委員会編，1985）。金村別雷神社は崇敬祈願社として勧請された社歴を有し、雷神としての御利益を通して関東地方の農村部に広く信仰が受容されているといえる。

Ⅱ-2 氏子地域

つくば市豊里地区は標高約30mの平坦な筑波台地上に位置する。地区内には東谷田川、西谷田川



第1図 つくば市豊里地区の概観（1995年）

が南北に貫流し、両河川域沿いに谷津田が開かれている。豊里地区西端には小貝川が流れ、旧下総国と常陸国の境界をなし、流域の低地は水田地帯になっている。台地上は関東ローム層が被覆し、土地利用では平地林や畑が卓越している。

金村別雷神社が立地する上郷地区は豊里地区の中心集落で、1724（享保9）年の戸数は339、人口1,662であった（竹内編、1980）。1889（明治22）年の市制町村制施行により、上郷村（大字上郷、木俣、手子生、野畑）、旭村、吉沼村が成立した。金村別雷神社の氏子地域はこの旧上郷村の範囲にあたる。その後1955（昭和30）年に上郷、旭両村が合併し豊里町が成立した。翌年、吉沼村田倉、上里地区を吸収しほぼ現在の豊里地区の範囲となった。1987（昭和62）年には近隣の大穂町、谷田部町、桜村とともにつくば市になった。

Ⅲ 個人崇敬者の祈願特性

本節では、豊里地区における個人崇敬者の祈願内容、参詣季節及び地区内各集落別にみた個人崇敬者率を検討する。

Ⅲ－１ 祈願内容

第1表は、1931（昭和6）年度と1995（平成7）年度の個人崇敬者数を、豊里地区（当時は上郷村、旭村の全域と吉沼村の一部）と豊里地区以外居住者に区分し、祈願内容別に示したものである。1931年度には、全体で1,281名の祈願者があり¹⁾、このうち25.2%にあたる323名が豊里地区居住者であった。全体の78.3%にあたる253名が出征兵士の無事（以下兵士安全と表す）²⁾を祈願している。これに次ぐのが家内安全祈願の59名（18.3%）であり、この両祈願で全体の96.6%を占めており、その他の祈願はほとんどみられない。1931年は満州事変が発生した年であり、留守家族や地域住民

第1表 個人崇敬者の祈願内容（1931、1995年度）

祈願内容	1931 年度		祈願内容	1995 年度	
	豊里地区	豊里地区以外		豊里地区	豊里地区以外
兵士安全*	253	693	家内安全	165	382
家内安全	59	174	交通安全	69	113
病気平癒	5	17	商売繁盛	42	28
身体健康	1	34	七五三	14	18
取子	0	12	厄除・方位	10	26
虫封	0	9	病気平癒	8	12
その他	5	19	業務安全	6	7
計	323	958	学業成就	3	8
			雷・風除	0	11
			五穀豊穰	0	8
			その他	6	9
			計	323	622

数字は祈願者数を示す。但し1931年度は居住地不明者、1995年度は祈願内容不明者を除く。

*武運長久、入営身上、出兵身上、除隊御礼の各祈願を含む。

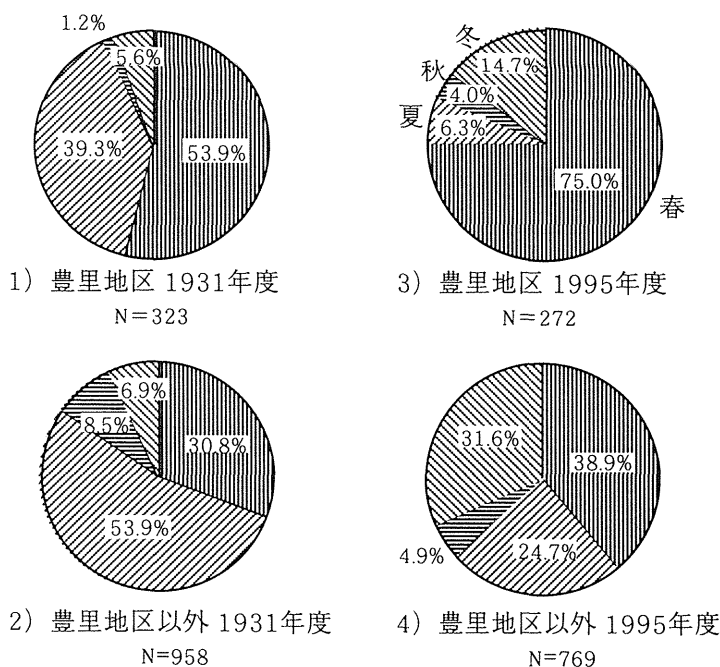
（金村別雷神社社務所資料より作成）。

による兵士安全祈願が金村別雷神社に対する祈願の多数を占めていたものと考えられる³⁾。このような戦勝祈願や兵士安全祈願は当時の日本の神社では一般に行われていた。第1表によると、兵士安全と家内安全祈願に特化する傾向は、豊里地区以外の祈願者の場合でも同様であるが、神社から遠方にあたる地域の崇敬者には、取子や虫封などの呪術的な祈願もみられる。このような傾向は1995年度においても看取される⁴⁾。神社の近隣地域に居住する個人崇敬者において、家内安全や交通安全祈願といった、金村別雷神社が本来有している御利益とは関連性の希薄な祈願が卓越しているのに対して、遠隔地域に居住する個人崇敬者の中には、雷除、風除や五穀豊穡などの金村別雷神社本来の霊験に由来する祈願者が少数ながらも存在する。個人崇敬者の祈願内容から推察すると、水を司る神として勧請された神社ではあるが、金村別雷神社は豊里地区の住民にとって、地域の鎮守神的な存在として信仰を受けていることがわかる。

Ⅲ－２ 参拝季節

第2図は、同じく1931年度と1995年度における個人崇敬者の参拝季節を百分率で示したものである。豊里地区と他地区を比較すると、参拝季節にも顕著な差異がみられる。

豊里地区居住者の場合、春（新暦1～3月）参拝者、なかでも正月の参拝者比率が卓越している。正月に参拝者が集中する傾向は近年強まっており、1931年度には53.9%であった春参拝者率は、1995年度には75.0%まで増加している。春参拝者のうち元日の参拝者が年間の57.7%（157人）を占めている。この新年参拝者の大半は家内安全祈願者であり、豊里地区居住者にとって金村別雷神社は、



第2図 個人崇敬者の参拝季節（1931、1995年度）
（金村別雷神神社社務所資料より作成）。

初詣に家内安全祈願に参拝する神社としての性格を強めているものと推察される。

一方、豊里地区以外の居住者の場合、1931年度をみると夏（新暦4～6月）の参拝者比率が53.9%と過半数を占めていた。これは、春季大祭（旧暦3月中旬）時における個人参拝が多いからである。春季大祭は、「お雷待ち」とも呼ばれ、崇敬者が赤飯や草餅を持って参拝し、夏の雷による降雨を祈願する祭りであり、1992年までは旧暦で行われていた。豊里地区以外の、特に神社から遠隔地に居住する崇敬者は、大祭時に講中の一員として参拝した機会を利用して、個人的に祈願を受ける例が多数みられた。1995年度になると参拝季節の分散化が進行し、季節別では豊里地区と同様、正月を中心とする春参拝者の比率が最高である。しかし、秋季大祭（新暦11月23日）時の参拝者を主とする冬（新暦10～12月）の参拝者率が増加（31.6%）しており、春秋大祭時に参拝する傾向が強いという点では変化がなく、豊里地区居住者とは対照的な参拝傾向を有している。

Ⅲ－3 集落別分布

第2表は、豊里地区の集落別に個人崇敬者を世帯単位で集計し、集落の全戸数に占める個人崇敬者の割合（以下個人崇敬者率と表す）を示したものである。豊里地区の全戸数3,135（1996年）に対し、個人崇敬者は227戸であり、その比率は7.2%である。この数値は氏子集落（大字上郷、木俣、手子生、野畑、第1図参照）とその他の集落で大きく異なる。氏子集落では1,229戸中、166戸が個人崇敬者であり、個人崇敬者率は13.5%に達する。これに対して、氏子地域外では1,906戸中、わずかに61戸が個人崇敬者であり、個人崇敬者率は3.2%に過ぎない。この個人崇敬者率は氏子集落内部でも差異がある。金村別雷神社が立地する大字上郷では、個人崇敬者率が16.1%に達するのに対して、個人崇敬者を含む戸数は大字木俣では2人、大字手子生では4人、大字野畑では皆無であり、3地区合計の個人崇敬者率は2.5%に過ぎない。この三地区は大字上郷と同じ氏子地域とはいえ、1889年の市制町村制施行以前は別個の村であった。筆者の聞きとり調査では、この3地区の住民にとって、金村別雷神社は旧上郷村の鎮守社という意識があり、個人レベルでの崇敬者率に格段の差異が生じているものと考えられる。大字上郷内における集落別の個人崇敬者率を検討すると、旧鳥居前町であった雷神地区が67.7%で最も高く、以下野手（52.2%）、向金村（36.4%）、本金村（24.7%）など神社に近接する集落で、個人崇敬者率が高くなっていることがわかる。個人崇敬者率の高低は、江戸時代に淵源を持つ旧村単位での氏子地域の枠組と同時に、神社への距離という要因が関連していることがわかる。

以上のように、豊里地区居住の個人崇敬者を他地区との比較から検討すると次の2つの特徴が指摘される。

祈願内容では、兵士安全（1931年度）や家内安全、交通安全（1995年度）に特化しており、これらの祈願を正月の初詣として行う崇敬者が多数を占めている。これは、雷神としての直接の御利益を期待するというよりも、その靈験の間接的な表出として、豊里地区の鎮守神的な神社として金村別雷神社が信仰されているものと考えられる。

また個人崇敬者の分布からは、金村社を鎮守神的な対象としているのは、豊里地区全体ではなく、

その内部にも地域差が存在することがわかる。藩政村に相当する大字上郷の範囲，わけても神社に近接する集落で個人崇敬者率が高いことがわかる。

Ⅳ 金村講の組織と信仰形態の特性

本節では，豊里地区における集落の共同祈願として，金村信仰の形態とその組織の特性を検討する。

第2表 つくば市豊里地区における個人崇敬者率（1995年）

大字名	集落名	全戸数	崇敬戸数	崇敬者率（％）
上郷	雷神	31	21	67.7
上郷	野手	23	12	52.2
上郷	向金村	33	12	36.4
上郷	上宿	48	13	27.1
上郷	本金村	73	18	24.7
上郷	大山	41	9	22.0
上郷	新宿	19	4	21.1
上郷	権下	40	8	20.0
上郷	道角	73	10	13.7
上郷	大宿	213	29	13.6
上郷	横町	46	5	10.9
上郷	上郷	43	4	9.3
上郷	権上	38	3	7.9
上郷	西原	31	2	6.5
酒丸	酒丸	141	9	6.4
上郷	神谷森	86	5	5.8
上郷	朝日町	35	2	5.7
木俣	木俣	38	2	5.3
高野	高野	117	5	4.3
今鹿島	今鹿島南※	321	13	4.0
沼崎	沼崎	209	8	3.8
吉沼	田倉	108	4	3.7
東光台	東光台	277	10	3.6
百家	百家	89	3	3.4
上郷	台宿	60	2	3.3
遠東	遠東	71	2	2.8
今鹿島	今鹿島北※	263	7	2.7
手子生	手子生	158	4	2.5
上郷	角内	40	1	2.5
野畑	野畑	40	0	0.0
上郷	仕出	20	0	0.0

崇敬者率とは集落の全戸数に占める崇敬戸数の割合である。

※資料の制約上，今鹿島は次の2地区に区分した。

今鹿島北：上宿，五斗蒔，下宿，池端，寺町

今鹿島南：今新田，皆畑，椿本，稲荷前

（金村別雷神神社社務所資料より作成）。

出典：Matsui, 1999を加筆・修正。

IV-1 祈雨祈祷

第3表は、第2次世界大戦以前の1931（昭和6）年および1932（昭和7）年における豊里地区各集落の祈雨祈祷記録である。金村別雷神社に残る当時の「祈雨御神函請求書」によると、当時の豊里地区の各集落では、夏季の7月、8月に干天が続くと、村長と区長名で降雨祈願を金村別雷神社に請願していたことがわかる。この資料によると、集落名、村長名、区長名を連記の上、干害を受けている田畑（反別）、戸数、里数方位を記載し、代参人（通常は2名）の押印とともに神社宛に依頼した。

祈雨祈祷を受けた代参人は、金村別雷神社の北側裏手にあるため池状の井戸から神水を授与され、集落に帰参した。神水は竹筒の容器に保持され、集落まで迅速に運搬された⁵⁾。神水は集落の清浄な場所（産土社など）に安置され、一同が神酒、神饌を奉納し、神言を唱和する。神水と集落の水と混合させた水が各戸に配布され、各自の田畑に散布された。集落では神社から受けてきた竹筒の容器に「お返し水」を入れ、1週間以内に金村別雷神社に御礼参りをするのが慣例であった。また降雨祈願の際には、婦女子を接近させないことや、雑談談笑をしない、期間中は鶏卵とタケノコを食さないといった禁忌が定められていた。これらのような禁忌からも、降雨祈願が集落全体で遂行される共同祈願であったことがわかる。

豊里地区の中でも今鹿島地区一帯は、台地上の畑作地帯で特に水不足に悩まされた地域である。第2次世界大戦以前には今鹿島の各集落では、日照りになると降雨祈願が行われていた。椿本集落では、

第3表 つくば市豊里地区における金村別雷神社への祈雨祈祷記録（1931～2年）

年次	参拝日	大字名	集落名	奉納金	代参者数	御礼参り日
1931	8. 7	上郷	上宿	100	—	8.13
	8. 9	遠東	遠東	150	5	8. 9
	8. 9	手子生	手子生	150	2	8.17
	8.10	上郷	金村	50	4	8.11
	8.11	高野	高野	150	2	8.12
	8.11	酒丸	酒丸	150	1	9.18
	8.11	上郷	大宿	100	—	8.17
	8.11	上郷	角内	100	2	8.12
1932	7.16	上郷	大宿, 上宿, 横町	500	2	7.22
	7.21	上郷	本金村	150	6	7.27
	7.23	上郷	角内	150	3	7.28
	7.23	今鹿島	五斗蒔	150	8	7.28
	7.24	高野	高野	150	—	7.28
	7.24	上郷	大山	100	—	7.24
	7.24	今鹿島	今鹿島	150	2	7.26
	7.25	上郷	神谷森	150	3	7.27
	7.25	百家	百家	150	2	7.29
	7.26	今鹿島	池畑坪	150	5	7.27
	7.26	今鹿島	皆畑	150	1	7.27
	7.26	今鹿島	稻荷前	150	2	7.28
	7.26	上郷	権上, 権下, 西原, 台宿	900	1	7.27

*奉納金は単位 円 代参者数は単位 人, —は不明.

(金村別雷神社祈雨祈祷控より作成).

出典: Matsui, 1999を加筆・修正.

集会所の庭の中央部に、水を満たした大きな桶が置かれ、その中に金村別雷神社から授与された水を混入する。桶の周りには村中の若者が禪姿で集まり、「さ（ん）げ、さ（ん）げ、六根清浄」などと叫びながら、相互に水を掛け合った。太鼓をたたき盛大に行われたという。今鹿島地区北部の集落では、観音堂のある広場に、集落の若者が禪姿で集まり、中央部に満水のたらいを置く。青年が筑波山神社、壮年が金村別雷神社、老年が鹿島神社（産土社）へとそれぞれ水を貰いに代参し、その水をたらいに入れる。太鼓の囃子にあわせて「さんげ、さんげ、六根清浄、おしめり、はつまいり、〇〇様（神名）」のような唱言をし、全員で水を掛けあった。降雨祈願は雨が降るまで続けられたという。

高野地区では1935（昭和10）年頃までは、雨乞い神事が行われていた。雨乞いは、村の鎮守である熊野神社の前の四つ辻で行った。中央に水を浸した樽を置き、金村別雷神社から竹筒で神水の授与を受けると、それを樽に入れる。雨乞いの回数が2回の時は、2度に分けて（金村別雷神社の神水を）樽へ注いだ。村中の青年男子は裸で樽の周りを囲み、太鼓の囃子にあわせて、みんなで水を掛けあったという。雨乞い神事の後に、実際に雨が降ると、金村別雷神社へ御礼参りにいった。

今鹿島地区や高野地区は筑波台地上に立地する乏水地にあり、農業生産は天水を頼りにしており、稲の収穫がなかった年もあった。この事例のように、井戸が普及しておらず農業生産を天水に依存していた第2次世界大戦前には、日照りが続くと金村別雷神社に降雨を求めて共同祈願がなされていたと考えられる⁶⁾。

Ⅳ－2 豊作祈願

雨乞いとは別に、豊作祈願のために春の播種期に、金村別雷神社に日参する集落もあった。木俣地区では旧暦3月17日が「日参始め」の日である。当地区では祭田と呼ばれる神田があり、当日がこの共有田の鍬入れの日であった。1940年頃までは、午前中に鍬入れを行い、午後に公民館へ各戸の世帯主が集まって飲食をした。この当時は、旧暦3月17日から同5月6日まで、講員全員が輪番で金村別雷神社に毎日代参を行っていた。「昭和〇〇年度 金村講日参始め」と書かれた五角形型の木製の板に、氏子総代が講員全員の世帯主名を左側から参拝順に記し、講員はその参拝順にしたがって毎日順番に代参した。翌年になると、この板（講帳）は表面に鉋がかけられ、再び講員名が記されて使用された。

現在では雨乞いや日参参りの共同祈願を行う集落はない。豊里地区には1995年時点で団体講6、日月年参講6の計12の講が組織されている（第4表）⁷⁾。豊里地区の金村講は大字もしくは区を単位とする地縁組織であり、原則として新住民を除く全戸が加入している。このうち、1995年度における団体講および日月年参講の活動内容のうち代表的な集落を2事例ずつ示す⁸⁾。

Ⅳ－3 団体講の信仰事例

1) 高野地区

高野地区の金村講には、特に名称はなく雷神さま、雷神さんなどと呼ばれている。高野地区は61戸からなるが、新住民及び創価学会員を除く50戸ほどが講員である。講員数には近年、大きな増減

はみられないが、各戸の事情に応じて、毎年若干の変動がある。

1989（平成元）年まではY氏が世話人を務め、講運営全般を担っていた。Y氏は旧旭村の村会議員であり、第2次世界大戦後に神社側の勧誘を受け、講を設立したとされる。同氏が死去した後、世話人は息子が引き継いだ。が、家業が忙しいこともあり、数年後からは、区長が世話人を代行するようになった。ところがこの制度も続かず、現在では高野地区の各戸が持ち回りで世話人を務めている。高野地区の自治会は全体で7班あり、1班から順に、3戸づつが世話人となり1年間で次の3戸と交代する。

世話人の仕事は、講員の確認、講金の集金、代参および神札の配布である。毎年、11月の参拝の前に当該年度の講員を確認するとともに、各戸をまわり講金（1,000円）を集金する。代参後に神社で受けてきた札（中札）は、世話人により各戸へ配布される。配札方法については世話人に委ねられている。直会を含めて金村講としての宗教行事は行われていない。

2) 中東地区

中東地区の宗教行事の世話人を務める家（1戸）は当番と呼ばれ、当番は産土社である神明神社の氏子総代がこれを務める。当番は1年交代の輪番制である。集落内で行われる主要な宗教行事を担当する。前年と翌年の当番（予定者）が補佐をする。さらに前々年の当番を務めた家と翌々年に当番を務める家をあわせて、この5戸を氏子組織の役員という。このように中東地区では氏子組織の役員の任期は5年間である。金村講の世話人は産土社の総代が兼務している。

金村講には全戸が加入している。中東地区では以下の手順で金村別雷神社への代参が行われる。10月の中旬に神社から秋大祭の案内が世話人あてに郵送される。当番はこの案内を受けて、11月初旬に講員各戸をまわり、講金1,500円を徴収する。秋大祭の1週間程前（11月15日頃）には集金した講金を当番が神社に納めにいく。大祭当日である11月23日の午前中に氏子組織役員の2名が金村別雷神社に代参する。集落へ戻ると、当番が各戸へ神札を配布する。授与される神札は家内安全の祈願がなされた中札であり、各戸では神棚に祀られる。金村講として代参の前後に講員が集まることはなく、終了後の直会も催されない。

IV-4 日月年参講の信仰事例

1) 大山地区

大山は大字上郷に属しており、氏子集落である。集落単位では正月（松の内）に区長（2年交代）と班長（6名、1年交代）の計7名で参拝する。区長は（大）木札を受け、班長は中札、その他講員には虫札が配布される。区長は拝殿に上がり祈祷を受ける。その後、参拝者全員で直会を開く。講員に対する札の確認及び配布を行うのは、班長である。集金は原則として米1升もしくは1,000円を年末のうちにいう。これは氏子集落内の規定に沿ったものである。

2) 木俣地区

金村講に加入している戸数は26であり、産土社である赤祇神社の氏子組織と同一構成である。木俣地区の宗教行事の世話人を務める家（氏子総代）は当家^{とうけ}と呼ばれる。当家は任期1年の輪番制で2

戸からなる。木俣地区では、豊里地区他集落とは異なり、金村講の世話人は5～10年交代（任期不定）で集落の草分けである旧家の3戸が持ち回りで担当する。金村講の行事は年に3回ある。

第1は、松の内のあけた1月10日～11日に行われる道切りである。当日の午前中、総代が金村別雷神社に代参し、神札（大札）を二枚購入する。総代は集落の南北の辻に、購入してきた金村別雷神社の神札を1枚ずつ立てる。これは辻札と呼ばれ、高さ1～2m、半径5mm程度の細長い篠竹の上部30cmほどの所の幹部を割り、この間に紙製の札を差し込み、辻に面する道路脇に立てるものである。辻に札を立てる際に特別な宗教儀礼はない。

第2は先述した「日参始め」である。現在では、新暦3月17日に氏子総代だけが金村別雷神社に参拝し、5月6日まで講員は金村別雷神社に参拝することではなく、この「日参始め」と書かれた講帳を毎日、参拝順にしたがって回覧する。3月17日に総代が金村別雷神社に参拝する際にも昇殿祈願を行うことはなく、神札の授与もない。また氏子総代が金村別雷神社から戻ってきた折にも、特に宗教行事はなく、直会も行われない。

金村別雷神社の氏子集落である木俣では、秋大祭の新暦11月25日に、他の氏子集落とともに昇殿祈願を行う。これは氏子総代ではなく、金村講の世話人が代参する。10月の半ば頃に、神社から秋大祭に関する案内が郵送される。それを11月5～10日頃に金村講世話人は、講員各戸を回り寄付を受ける。寄付は以前は米1升であったが、現在では一律1,000円の金納である。世話人は11月12日頃には当年度の金村講名簿と寄付金を神社へ納める。秋大祭当日は、祈禱を受けた後、集落に戻り世話人が各戸宛に神札を配布する。この際にも講員による直会などの宗教行事は行われない。

Ⅳ－5 金村講にみられる信仰形態の特性

第4表は1995年における、豊里地区各集落で組織されている金村講の信仰形態を整理したものである。ここでは金村信仰の豊里地区における地域的特性を明らかにする上で重要であると考えられる、結成年代、世話人、信仰形態の3点について検討する。

1) 結成年代と結成理由

結成年代では、団体講の場合、上里の1991年を除くと大半の集落で、第2次世界大戦後の1940年代に結成されている。年参講の場合には大半の集落で結成年代が不明である。ただし1931年の参拝資料に上郷中央青年会と大山集落は記録されており、他の集落も概ね第2次世界大戦前後には組織されていたものと推察される。

豊里地区各集落における金村講の結成理由として、次の3点を指摘することが可能である。第1には神社側からの講結成の勧奨である。団体講は、もともと社内とよばれる雷神地区の人々による勧誘活動により生まれた講である⁹⁾。これは鳥居前町で商売を行っている社内の人々が、神社への参拝者の増加による商業活動の活発化を目途して起こしたものである。各講への連絡も神社が直接関与することではなく、社内の人たちによって案内がなされており、神社は講金の30%を受領する仕組みになっていた。昭和初期には観菊団体講と呼ばれ、秋の観菊を目的とするレクリエーション機能を兼ねた講であった。戦中になると金村雷神戦勝祈願団体講と名称を変更した。団体講に関する記録は多くが散

第4表 つくば市豊里地区における金村講の信仰形態（1995年）

講種	講番号	地区名	結成年代	範囲	戸数	世話人			信仰形態			
						人数	属性	任期	代参人数	代参の決め方	講の儀礼	授与札
団体講	1	高野	1940年代	大字	62	3	なし	1年	3	世話人が代参	なし	神札
	2	遠東	1940年代	大字	50	1（世襲）	なし	なし	1	世話人が代参	なし	神札
	3	中東	不明	大字	43	3	氏子総代	1年	3	世話人が代参	なし	神札
	4	上里	1991年	大字	106	6	氏子総代	6年	6	世話人が代参	なし	神札
	5	今鹿島皆畑	1940年代	集落（区）	85	1	氏子総代	2年	1	世話人が代参	なし	神札
	6	今鹿島椿本	1940年代	集落（区）	39	1	区長	2年	1	世話人が代参	なし	神札
年参講	7	今鹿島上宿	1940年代	集落（区）	48	2	氏子総代	1年	2	世話人が代参	なし	辻札
	8	角内	不明	集落（区）	39	1	氏子総代	1年	1	世話人が代参	なし	辻札
	9	木俣	不明	大字	38	3（世襲）	なし	なし	1～2	世話人が代参	なし	神札・辻札
	10	横町	不明	集落（区）	46	1	区長	2年	1	世話人が代参	なし	辻札
	11	大山	不明	集落（区）	40	7	区長ほか	1～2年	7	世話人が代参	なし	神札

本表の他にも上郷中央青年会による年参講がある。

（現地調査より作成）。

出典：Matsui, 1999を加筆・修正。

逸し残されていないが、現存する講のうち今鹿島皆畑と高野では社内在住の人々（神官を含む）によって、講が結成されたと伝えられている。

第2には、集落の産土社祭祀執行に伴う講結成である。これは上里集落に該当する。上里集落の産土社（鹿島神社）の神主が1990年に死去した後、金村別雷神社宮司が産土社の祭礼を引き継いだ。これ以前は下妻市にある腕権現の宮司が祭礼を執行していた。腕権現宮司が死去し、金村の宮司が祭礼を執行することになり、集落として、金村宮司に対する祭礼執行の御礼という意味を兼ねて、集落の氏子組織の世話人だけで1991年に講が結成された。したがって金村別雷神社の神札を集落の講員に配布することではなく、集落の氏子総代役員（6名）が各々個人的に神札を受けてくるという形式の講である。

第3として、戦前の共同祈願に由来する講の結成である。今鹿島上宿では、第2次世界大戦前には同様の共同祈願を大杉阿波神社（茨城県桜川村）に対して行っており、大杉講と呼ばれる代参講が組織されていた。当時は今鹿島の北部5集落は宗教組織的には一体であり、大杉代参もこの北部集落で一つのまとまりとなり、行われていた。ところが第2次世界大戦中に大杉代参が途絶していたところ、戦後になって復活の気運が高まり、上宿集落のみで、金村別雷神社に参拝するようになったという。第2次世界大戦前からの降雨祈願を通して、金村別雷神社と結びついていた集落が、戦後になって講組織となった例は大山や角内などの各地区でもみられる。

2）世話人

次に世話人について検討する。豊里地区における金村講の世話人に特徴的であるのは、11集落中、9集落で世襲制が採用されておらず¹⁰⁾、世話人が1～2年間の単位で交代する点である。一般的には社寺参詣を目的とする参拝講の場合、世襲制の世話人が相当期間務めるのが通例である。世話人の属性をみると、高野、遠東、木俣を除く8集落では、集落の産土神の氏子総代（含む祭典係）もしくは区長が世話人になっている。先に信仰事例としてあげた高野や中東集落の場合も、輪番制で務める産

土社の氏子総代が講員の確認や参拝、配札を行っている。このことは、集落の宗教（氏子）組織や自治会組織と金村講とが結合し、その組織統括者が金村講の世話人を兼務していることを意味している。世話人が1～2年周期で交代するのも、金村講の組織が集落内で自立した宗教組織でないために、兼務する氏子組織や行政組織の任期に制約されるからである。すなわち金村講が独立した実質的な組織としてではなく、産土社の氏子組織や自治会組織に従属した組織であることが指摘できる。

3) 信仰形態

次に信仰形態に関して、代参者と講の儀礼の点から検討する。年に1回の参拝時における代参者は、各集落とも世話人である。この代参者が講員による輪番制ではない点に特徴がある¹¹⁾。このように講員による輪番制をとらず、特定者が代参するという点で、通常の代参講組織とは異なっていることがわかる。講の儀礼に関してみると、いずれの集落においても、代参者のくじ引きや参拝後の直会といった宗教行事が営まれていない¹²⁾。講員が全体で集まる機会は1度もなく、世話人による神札の配布が講としての活動のすべてであるという集落も多い。このことは、金村講が独自の宗教組織としての機能を有していないことを意味している。

以上を整理すると次のことが指摘できる。戦前期の豊里地区各集落では、共同祈願としての祈雨祈禱や豊作祈願を金村別雷神社に行う集落が多かった。1995年時点では、この共同祈願に淵源を有する日月年参講と1940年代以降の比較的新しい時代に神社側の勧奨を受けて成立した団体講が組織されている。しかしながら各集落での金村講の組織は、集落の宗教組織や行政組織と結合しており、世話人も氏子組織や自治会の責任者が兼務している。したがって金村講は自立的な宗教組織を形成しておらず、講が独自の組織として機能していないと考えられる。このことは講に儀礼が営まれていないことから明らかである。

V お わ り に

本稿では、つくば市豊里地区における金村信仰の特性を、個人崇敬者と講の分析から検討してきた。本研究で得られた知見を整理すると次の通りである。

豊里地区住民の個人崇敬者の祈願内容（1995年度）をみると、家内安全と交通安全の両祈願で全体の80%弱を占めている。参拝時期では春季（1～3月）が卓越しており、とりわけ、元日に年間の個人崇敬者の60%弱が参拝しており、この正月への集中傾向は近年高まっている。第2次世界大戦前における個人崇敬者の祈願内容の中心は兵士安全祈願であった。この兵士安全や家内安全といった祈願は、崇敬祈願社として金村別雷神社が本来有している御利益とは、直接の関連性が低い祈願である。すなわち豊里地区の住民にとって、個人祈願の対象としては特定の御利益を持って奉じられる流行神的な利益神ではなく、地域の鎮守神として信仰が受容されているといえる。

これに対して、雷を司り降雨をもたらす利益神としての信仰は、豊里地区各集落における共同祈願にみることができる。乏水性の筑波台地の上に位置する豊里地区各集落では、第2次世界大戦以前には農業生産を天水に依存する集落もあり、夏季の渇水時には降雨を求めて、金村別雷神社に祈雨祈願が行われていた。第2次世界大戦後になると、このような共同祈願を機縁として豊里地区の各集落に

は講が組織されていった。しかしながら講としての参拝は形骸化しており、固定化された世話人による代参か、もしくは氏子組織や自治会組織など他の組織の代表者が金村講世話人を兼務し、輪番制で選出される世話人が代参するのが通例である。豊里地区における金村講の特性は、講が宗教組織として独自の機能集団を形成しておらず、従属的組織となっている点にある。

このことは次の3点から明らかとなった。すなわち、金村講の世話人が原則として非世襲的性格を有し、多くは氏子総代や区長といった他の宗教組織、自治会組織の代表者による兼務が行われていること、構成員が氏子組織、もしくは他の宗教組織と同一であること、講員による集会や共同飲食の機会が存在せず、講としての機能を果たしていないことである。したがって金村講は、宗教組織としての独立性が希薄であり、集落内の他の宗教組織や自治会組織と融合し、付帯的に組織化されている。講の目的は金村別雷神社の神札の授与であり、講が神札を定期的に授与されるための便宜上の組織になっているといえる。豊里地区の各集落の中には、戦後の国家神道解体後に、経済基盤が脆弱化した神社側による積極的な勧奨活動により講が新たに結成された集落もある。このような講結成時の非主体的状況も一因として働いているものと考えられる。

既往の研究蓄積が多い山岳信仰の場合、神社（山岳）の近隣集落での講の形態が、地域共同体の組織と結合する性格を有している点は、柳川（1955）や岩鼻（1983）による出羽三山研究や西海（1997）による石鎚山の研究においても指摘されている。山岳の存在自体が集落の住民に生産基盤を提供し精神世界に大きな影響を与えている山岳信仰に対して、金村別雷神社のような崇敬祈願型の勧請神は、その宗教的志向性が本来的に異なる。このような勧請神の場合でも、第一次信仰圏における講組織の共同体的な組織との結合という特徴が看取された。金村別雷神社が鎮座する豊里地区の住民にとって、個人的な信仰次元では産土社の信仰範囲を超える準広域的な鎮守神として、また共同体の次元では、農業生産に安定をもたらす利益神として信仰されている。しかし、戦後における急速な農業生産技術の発展と灌漑設備の整備により、この利益神的性格は大きく変容しているものと思われる¹³⁾。

紙幅の関係もあり、個別の集落における信仰の具体的な様態を検討することはできなかった。また他地域との比較という視点も重要である。もって次稿への課題としたい。

現地調査においては、金村別雷神社宮司所 弘司氏は金村講世話人の皆さまに大変お世話になりました。本稿の骨子は1998年1月に筑波大学人文地理談話会において発表したものである。

なお、報告のとりまとめのために、平成12年度文部省科学研究費補助金 奨励研究(A)「信仰受容の重層性からみた信仰圏の地域構造に関する研究」（代表者 松井圭介、課題番号11780061）の一部を利用した。

注

- 1) 居住地不明1名を除く。
- 2) ここには武運長久祈願や入宮祈願、動員出兵祈願なども含む。
- 3) 豊里地区の内、満州事変から太平洋戦争の終結までに、旧上郷村で187人、旧旭村で251名の戦死者があった（豊里町史編纂委員会編、1985、p.209）。金村別雷神社の境内には戦没者のための忠魂碑が奉納されている。
- 4) 例えば、1995年度における雷除、風除の祈願者はいづれも埼玉県三郷市の居住者であり、1931年度の取子祈願者も埼玉県北葛飾郡の居住者であった。
- 5) 神水の運搬の際には、途中休憩することも忌避された。休憩するとその場所に雨が降り、祈願者の集

落に雨が降らないとの伝承がある。したがって信号停止などがあった場合でも、付近を周回して足を止めないようにしたという。

- 6) 今鹿島地区の椿本集落では、最後に降雨祈願が行われたのが1941(昭和16)年のことであった。
- 7) 金村講には、太々講、祈年講、団体講、日月年参講の4種類の講がある。また氏子地域では、自治会組織の29の地区ごとに秋大祭の時に世話人が代参し、講員分の神札を授与される。しかし金村別雷神社では、これを講としては扱っておらず、氏子による参拝の扱いとしている。本稿でも氏子地域における秋大祭の参拝組織は、金村講として扱わない。
- 8) 聞きとり調査は、1996年9月～12月に実施した。
- 9) 1928(昭和3)年に社内の住民と神社との間に団体講勧誘に関する契約書が交わされている。

- 10) 世襲制をとる遠東では現世話人が2代目、同じく木俣では3代目である。
- 11) ただし世話人自体が交代制なので結果的には輪番制になっている。遠東や木俣のように世話人が固定されている集落では、世話人が毎回代参している。
- 12) 筆者の調査では、参拝の前後に代参者の決定や神札の配布、直会などの講儀礼を有する事例も豊里地区外では確認している。例えば埼玉県吉川市の各講では、結び講、勘定講と呼ばれる講儀礼が行われている(Matsui, 1999)。
- 13) 講員の授与札をみると虫札(苗代の入口に虫除けを祈願して立てる)の授与数は減少しており、中札(神棚用の家内安全札)の授与を受ける講員が大半である。

参考文献

- 岩鼻通明(1983): 出羽三山信仰圏の地理学的考察。史林, **66**, 681-726.
- 金子直樹(1995): 日本における信仰圏研究の動向—山岳宗教を中心に—。人文論究, **45**, 104-117.
- 串田全男(1978): 『上郷史資料考』上郷史資料考刊行会, 330p.
- 竹内理三編(1980): 『角川日本地名辞典 11 埼玉県』角川書店, 1452p.
- 豊里町史編纂委員会(1985): 『豊里の歴史』豊里町役場, 248p.
- 西海賢二(1997): 『石鎚山と修験道(新装版)』岩田書院, 220p.
- 松井圭介(1999): 金村別雷神社信仰の地域的特性。人文地理学研究, **23**, 39-58.
- 宮田 登(1961): 山岳信仰と講集団。日本民俗学会会報, **21**, 5-14.
- 柳川啓一(1955): 村落における山岳信仰の組織。宗教研究, **143**, 41-64.
- Matsui, K. (1998): Reexamination of recent studies on the geography of religion in Japan. *Ann. Rep., Inst. Geosci., Univ. Tsukuba*, **24**, 7-12.
- Matsui, K. (1999): Regional Characteristics of the Belief in the Kanamura Betsurai Shrine between the Inner and Outer Areas. *Geographical Review of Japan*, **72B**, 1-22.

Religious Forms of the Kanamura Faith in the Toyosato District, Tsukuba City

Keisuke MATSUI

The purpose of this study is to show some characteristics of the Kanamura faith in the Toyosato district of Tsukuba City through analyzing some indices such as the distribution of believers, the content of prayers, and the organization or religious forms of Kanamura religious associations(*ko*). In the Toyosato district, a typical district of the inner area (the first zone), most of the individual believers used to pray for the safety of soldiers before the Second World War, and now pray for the safety of their own family in 1995. Referring to the content of prayers, those prayers are not derived from the nature of the Kanamura deity directly. This fact indicates that people in this area worshipped the Kanamura shrine not only as an efficacious deity but the tutelary status of the shrine.

Meanwhile, Kanamura religious associations do not function as autonomous religious groups and are dependent upon other religious or administrative organizations. This is proved by these three points. First, the position of the manager of Kanamura associations is basically non-hereditary and is often occupied by heads of other religious or administrative organizations such as the representatives of *ujiko* or the heads of settlements. Second, members of the Kanamura associations are the same as those of the *ujiko* organizations or other religious groups. Thirdly, there are no meetings or ritual feasts in which all the members take part. The Kanamura religious associations in the Toyosato district, therefore, are hardly autonomous and are often incorporated within other religious or administrative organizations. It can be said that their sole objective is to distribute amulets of the Kanamura Shrine.

Key words: religious sphere, Kanamura association, dependence on other organizations, tutelary deity